

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

本多由佳

【所属】(助成決定時)

早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科

【研究題目】

韓国劇映画における日本・日本人表象 —文化社会学の視点から—

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、第二次世界大戦後から現在に至るまでの韓国劇映画に注目し、その中で描かれる日本および日本人について文化社会学の観点からの分析を行うことである。それによって、映画産業や監督をはじめとする作り手、観客など映画を取り巻く環境の変化、それに伴う表象の移り変わりを分析することで、韓国から日本へのまなざしの変化をより実態に近い形で明らかにする。

映画の表象に時代精神・歴史観・民族意識が反映されることは避けて通れないが、それらの動向が表象にそのまま直結するわけではない。このことから表象には両国の政治的関係だけでなく文化的・社会的な関係はもとより、映画の作り手、観客の反応、興行なども複雑な形で反映されているという仮説に基づいた分析を行う。これにより、映画テキストと社会的文脈との関係を総合的に把握し、先行研究を基礎にしながら既存の研究よりも広範囲の作品を対象に、時代と共に変容してきた日本・日本人表象を新たなアプローチで捉え直すことを目指すものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

①「日本」「日本人」表象の実態調査

1940年代後半から現在に至るまでの韓国劇映画の中で日本に関する表象がどれほどあったのかを調べるために、韓国映像資料院が提供するデータベース(KMDB)を使用し、研究で扱う作品のリストアップを行った。申請者が設定した検索条件である、「日本・日本人表象のある長編一般劇映画」は約250本であった。

②文献調査：個別の作品閲覧および文献や関連資料の収集

①で選定した作品の中で、日本国内での閲覧が困難な1940年代後半から現在に至るまでの映像資料および関連文献の閲覧・収集を目的とし、韓国映像資料院が運営する映像図書館(ソウル市)での現地調査を数度にわたり行った。映像図書館で閲覧した作品は大きく分けて2種類である。

i. 二分法で捉えることのできる作品

植民地下の朝鮮を背景とし、「善と悪」、「敵と味方」というように韓国に対立する対象として日本が描かれている作品は多くの先行研究でも扱われてきたが、①で単純な二分法では語りきれない葛藤が描かれる作品も存在することが明らかとなったことから、それらを中心に閲覧した。

ii. それ以外の描かれ方をしている映画

先行研究で扱われることの少なかった、「悪」や「敵」としての日本人以外が描かれている作品を網羅的に閲覧した。韓国人主人公の親友、恋人、配偶者、協力者、師匠など多様な表象が見受けられた。その後、作品をアクション、ホラー、コメディなど9種類のジャンルに分類し、各ジャンルにおける表象の変遷を整理した。

さらに、個別の作品の関連文献・資料の収集も行った。対象とする映画には、イムグオンテクなど日本留学経験や自身の日本観について明らかにしている監督の作品が多く含まれることから、監督の評伝を中心に関連資料を閲覧・収集した。その他にも、観客の動向、日韓映画交流史に関する資料等も幅広く閲覧した。

また、現地での調査に加え、韓国映画振興委員会が提供するデータベースを利用した統計資料の調査、およ

び早稲田大学坪内博士記念演劇博物館図書室、駐日韓国文化院図書映像資料室等でも文献や関連資料の収集と調査を行った。なお、調査結果は未だ不十分であり、今後より詳細な調査を継続して行う予定である。

【結論・考察】（４００字程度）

現地での資料の閲覧および収集を通して、先行研究で扱われることの少なかった作品の表象分析を行うための強固な基盤を構築することができた。

日本人表象が目立つ作品は依然として植民地時代を舞台とした内容が多く、これまでと同様に悪・敵として日本を描いているものも継続して製作されている一方で、同じ題材でも、2010年代以降に製作されたものは日本による支配を単純な「時代的要素」として描いているものが多く製作されるようになった、というように二極化しながらもその表象は確実に変化してきていることが明らかとなった。

また、同じ題材でもジャンルの多様化や反日感情の盛り込み具合など、観客へのアプローチの仕方によって興行に大きな差が生まれている。以前は反日感情が強く表面化している作品が大きな興行を上げる、という例が少なくなかったが、最近になって必ずしもそうではなくなっているように移り変わる大衆の日本観も表象に反映されていることが分かった。